

特集
古代都市
～日本人とまちづくりの原点～

Special Features
Ancient cities
The Japanese and the origins of town development

古代に見る日本の原風景
Archetypal scene from ancient Japan

古代都市から見えてくるまちづくりの原点

館野和己

TATENO Kazumi

奈良女子大学/文学部国際社会文化学科/教授



本稿は古代都市にまちづくりの原点を求めようとするものである。具体的には、明確にまちづくりの原則があった7世紀以後の都(都城)に焦点を置き、その中でも平城京を主な対象として、その実態を探っていくことにする。

1—都城の立地

平城京は和銅3(710)年3月に藤原京から遷ってきた都である。和銅元年2月に遷都を宣言した元明天皇の詔の中で、平城の地について「四禽図に叶い、三山鎮めを作し、亀筮並びに従う」と、選地の理由を述べている。

「四禽」とは青龍(東)・朱雀(南)・白虎(西)・玄武(北)という神獣であるが、それが図(陰陽図緯)に叶うとはどういうことか、残念ながら当時の史料でその意味内容を正確に理解することはできない。しかし天武天皇や桓武天皇が、遷都候補地の地相を陰陽師や陰陽寮の官人に見せていることからすれば、平城遷都の時も陰陽寮が関与し、陰陽師によって平城の地勢は「四禽図に叶い」良い土地であると判断されたのであろう。

次の「三山鎮めを作し」とは、東の春日山塊、北の平



写真1—平城宮大極殿跡から見た春日の山々

城山丘陵そして西の生駒山地(ないしはその手前の矢田丘陵)が、平城の地を守るように包み込んでいるということであり、「亀筮並びに従う」は古いの結果が良かったとの意味である。要は東・北・西の三方に山があり南に開けるという地勢こそ、平城の地が選ばれた理由であり、それを宗教思想によって裏付けたのである。地勢による選地はほかの都城でも行われた。

藤原京については『万葉集』に香具山が東に、畝傍山が西に、耳成山が北に、そして吉野の山がはるか南にあるという地勢が詠われている(藤原宮の御井の歌 52)。

平安京も例外ではない。平安京を置いた山城国について、桓武天皇は「此の国、山河襟帯して、自然に城を作す」(『日本紀略』延暦13(794)年11月丁丑条)と述べ、山と河がめぐり、自然に城となっているという地勢の良さを指摘する。そこは平城京と同じように三方を山が囲み、南に開け、東から南に鴨川、西に桂川が流れているのである。



写真2—平城宮大極殿跡から見た生駒山

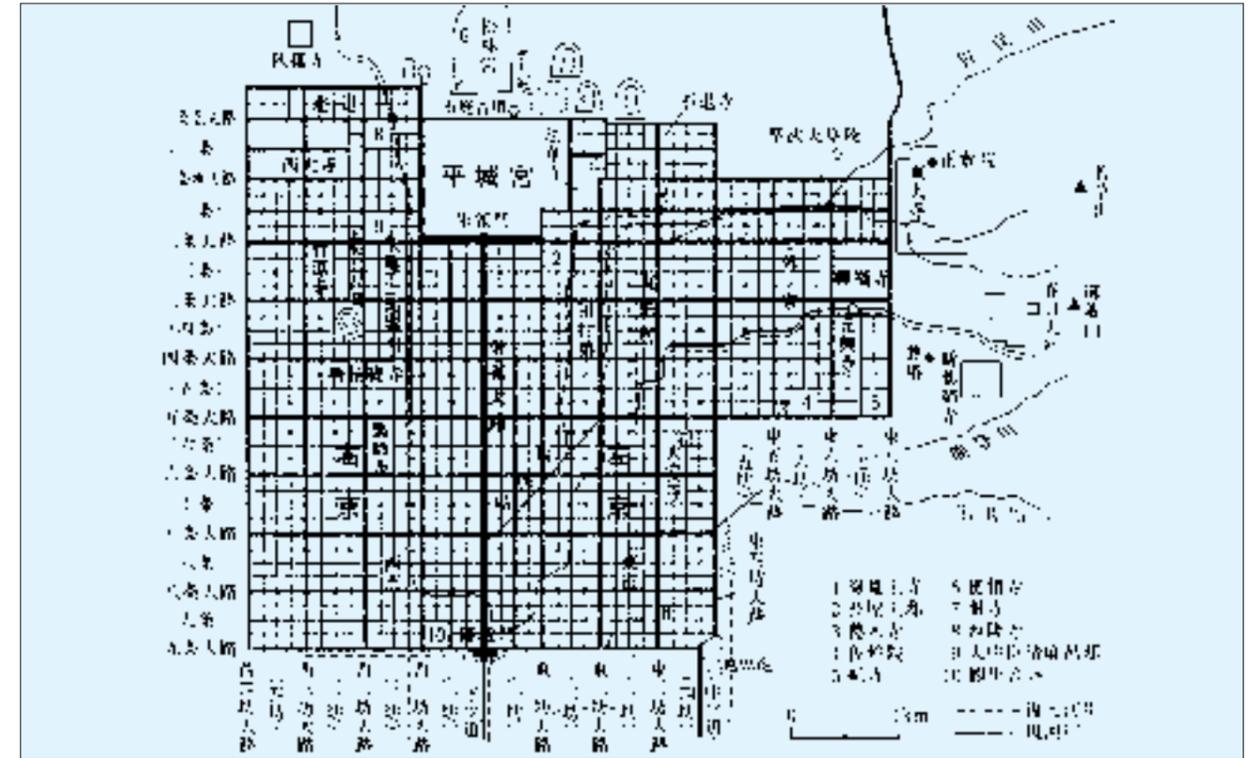


図1—平城京の都市計画

このように、日本の都城は山河に抱かれた地に築かれたのであり、十分に自然の恵みを取り入れていたとすることができる。そのことは7世紀に都が置かれ続けた飛鳥についても当てはまる。そこも周囲を山に囲まれ、飛鳥川が流れる小平野であった。

2—平城京の都市計画

藤原京以後の都は中国の都城に倣い、条坊制という都市計画を施工したきわめて人工的な都市であった。縦横に大路・小路を走らせ、碁盤の目のような町割り造られた。平城京について言えば、図1のように1,800尺(533m)ごとに大路を施工し、その間に450尺(133m)ごとに3本の小路を設け、小ブロックを造った。平城京建設以前から奈良盆地には、上ツ道・中ツ道・下ツ道という3本の計画道路が約2.1kmの間隔をとって南北に敷設されていたが、このうち下ツ道を拡幅して朱雀大路に、中ツ道を東京極である東四坊大路に造り替えた(ただし中ツ道は盆地を北上するほど西に寄ったため、実際は大路より1筋西の小路につながっている)。これらにより平城京は京外の地域とも結びつけられた。

都城は多くの人口を抱えていた。平城京では10万人以下とみられているが、その中核には官人たちがいた。彼らにはその位階に従って広狭を設けて宅地が与えら



写真3—平城京模型(奈良市蔵)



写真4—復原された平城宮朱雀門と朱雀大路の柳並木



■写真5—平城京左京九条三坊における東堀河と橋の遺構



■写真6—「槐」木簡

■写真7—「新羅人」木簡

れた。大きく見れば、高位の人ほど宮に近い所に大規模な宅地を与えられ、下位の人の宅地は宮から遠く小規模であった。都城は階層性のきわめて明確な場であったのである。奈良時代初頭、平城宮のすぐ東南の左京三条二坊には、後に左大臣にまで昇る長屋王(天武天皇の孫)邸があり、4ブロック(約250m四方)という広大な宅地を占めていたが、興味深いことに、宅地内にはあるべき小路が造られていなかった。つまり初めからそこには大規模邸宅が置かれる計画になっていたため、建都時の小路建設は王邸予定地を避けて行われたわけである。

左・右京にはそれぞれ東市・西市が置かれた。東市は左京八条三坊、西市は右京八条二坊で、ともに約250m四方を占め、毎日午後が開かれた。そこでは店舗を有する市人や行人などが営業し、京内外から多くの人が集まり、にぎわいを見せていた。

次に都市にとって重要な水の問題を見る。上水は基本的に井戸水を水源とし、排水は道路の両側に掘られた側溝に流した。そして側溝の排水は、左京の佐保川・岩井川、右京の秋篠川などの河川に流れこませていた。しかし京内の水路はそれだけではなく、左・右両京には大規模な堀河が造られた。今も京都では堀川通に沿って堀川が流れるが、それは平安京左京の堀川である。平城京では左京の三坊の中を南北に幅10mほどもある

東堀河が流れていたことが、発掘調査でわかったが(写真5)、それは東市の中を貫流していた。一方右京では薬師寺の東を「西の堀河」が流れていた(『今昔物語集』第12巻20話)が、それは秋篠川にあたる。秋篠川は自然河川の流路を付け替え、西一坊大路の1筋西の小路にはほぼ沿って流すようにしたものであり、西市の東辺を流れている。両方の堀河は市の配置と密接な関係をもって掘削され舟による、物資の運搬に用いられたのである。

都城には宗教施設も計画的に配置された。すなわち左京には大安寺、右京には薬師寺という国家的寺院が置かれ、左京が東へ張り出した部分には興福寺・元興寺などの氏寺に起源を持つ寺が配置されたのである。その一方で、神社は京内にはほとんど見あたらない。史料的に確認できるのは率川神社だけである。これは神が共同体の守護神という性格をもつため、旧来の共同体を破壊して人工的に建設された都城となじまなかったからであろう。京の住民の新たな共同体の構築も十分には進まなかったとみられる。

3—京内における自然の再現

都城は人工的なまちであったにもかかわらず、あるいはだからこそ、自然を取り込んだり、再現するような装置を多く設けていた。越中守であった大伴家持の歌「春の日に萌れる柳を取り持ちて見れば都の大

路し思ほゆ」(『万葉集』4142)で、柳を見て都大路を思い出しているのは、それが街路樹であったからである(写真4)。平城京内から出土した木簡(写真6)により、京内各所に槐が植えられていたことも知られた。柳・槐とも唐の都・長安城で街路樹として用いられており、それをまねたのであろう。

また東市にはシンボルとなる樹木が植えられていた(『万葉集』310)。そういえば飛鳥では、飛鳥寺の西に槻(けやき)の木のある広場があった。そこは蝦夷や倭人への饗宴の場となったり、中大兄皇子と中臣鎌足が知り合うきっかけになった打毬が行われたり、天皇と群臣らによる誓約も行われた。広場のシンボルとなっていた槻は、神の寄ります神聖な木であり、だからこそそこは特別なことを行われる場所となったのである。

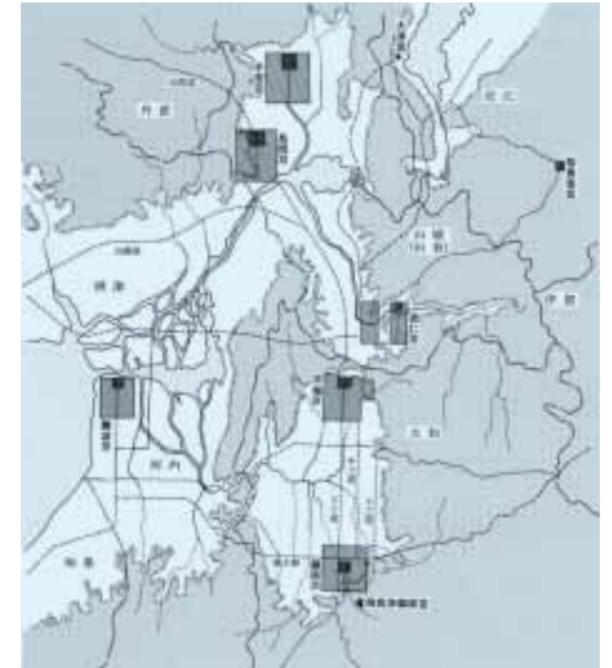
そのほか、平城宮・京内には苑や池などが造られ、緑豊かな景観をなしていた。京の北郊には松林苑があったし、宮内の西池の近くには梅の木が植えられていた(『続日本紀』天平10年7月癸酉条)。長屋王邸にも池が掘られ庭園が整備されていた(『懐風藻』)。大安寺境内には杉山古墳とその周濠が、「池并岳」として取り込まれていた(「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」)。

4—都城のくらしの二面性

日本の古代都城は中国都城に倣ったものであるが、日本独自の特徴もある。とりわけ中国では都城を囲い込んでいた羅城が、京南辺にしか築かれなかった。すなわち京が外部と直接つながっており、中国と比べてきわめて開放的な都城であった。このことはおそらく人々に大きな心理的影響を与えたことであろう。

その点では都城にいた人々の構成と活動も問題となる。都城には官人のほか、一般の農民、商人や奴婢・僧尼らが多く住んでいた。しかしそれだけではなく、外部から来ている人も多かった。毎年冬になると、全国各地から税を貢納する人々が大量に流入してきた。また各地から上京させられて、数年間にわたって役所で下働きや警備を担当する仕丁や衛士といった人たちも多量にいた。舎人や兵衛などになって都で勤務している諸国の郡司の子弟らも多数いたし、外国使節が来ることもあった。長屋王家では新羅人に食料を支給したことが木簡(写真7)からわかる。京内外の商人たちは、都と遠隔地を結ぶ活動を展開していた。

こうした状況下で、京にいる人々は、常には接触できない他所の人たちと交流を持つことができ、それにより多様な情報や物資を入手し、視野を広げることができた。



■図2—古代の都城位置図

これは都城ならではのことであり、様々な産業へも肯定的な影響を与えたことであろう。

その一方で、都城の大路に沿っては築地塀や柵が続く、家々が開口しているというのではなく、閉鎖的なまちの構造であった。それも一因となり京の住民の間には、共同体的関係が十分にはできあがらなかった。京内にほとんど神社がないことも、それと関係しよう。さらには階層性の顕著な都城では、都人としての一体感の成立も困難であったろう。

都城が思想的な背景をもってしっかりしたアーバンデザインの下、自然を生かした立地とまちづくりを行ったことは、十分に評価してよい。また全国各地から来ている人々との接触などを通じて、様々な情報を入手でき視野が広がることの影響も大きいものがあった。しかしその一方にある閉鎖的構造と都市住民の共同体的関係の欠如、階層性による閉塞感。それは古代都城の限界性を物語るものであり、都市が十分に住民のものにはなりえなかったということである。

このような古代都城の肯定的側面と否定的側面という二面性を十分に見据えると、そこに現代都市の課題も浮かんでくるようである。

<資料提供>

写真1、写真2、写真4 著者
写真3、写真5、写真6、写真7 奈良文化財研究所
図1 館野和己「古代都市平城京の世界」山川出版社
図2 奈良文化財研究所編「日中古代都城図録」